

鈴木耕太郎著

『牛頭天王信仰の中世』

—「中世神話」研究の新地平へ

斎藤英喜

近年、記紀・風土記などの古代神話にたいして、あらたな神話のフィールドが発見された。「中世神話」である。その研究視座は、日本紀注・神道書・寺社縁起・本地物語から、さらに地域社会に伝わる神楽・祭文へと拡大され、アマテラスやスサノヲという古代神たちの変貌とともに、土公神・新羅明神・摩多羅神・赤山明神などの「異神」たちの神話を掘り起こした。その異神のひとりこそ、「牛頭天王信仰の中世」と題された本書の主人公、牛頭天王にはかならない。本書は、中世神話が生み出した牛頭天王を真正面から取り上げた、これまでになかった一書だ。

もつとも牛頭天王は、祇園社（現八坂神社）の祭神として、行疫神かつ防疫・除疫神でもある両義性ゆえに荒ぶる神スサノヲと習合し、また薬師如来を本地仏ともする中世神仏信仰の一角を示す存在として知られている。また先行研究もけつして少なくはない。しかし本書のなかで鈴木耕太郎が明らかにしていく牛頭天王の相貌は、そうした一般的な認識をことごとく打ち砕いていく。その方法的な

ナイ」という地域共同体の信仰、祭礼の起源譚へと変奏していく様相を明らかにし、ここにも、特定の社寺に常住していない「宗俊」なる宗教者の関与を見定めていくのである。

このように本書の議論の多くは、常識化された祇園社祭神としての牛頭天王と異質な「牛頭天王」の姿を明らかにしていく。では、一般に知られる祇園社祭神＝牛頭天王は、いつ、どのように生みだされたのか。それを明らかにするのが第二章である。ここで見えてくるのは、ト部兼文・兼方「祇日本紀」、一条兼良「日本書紀纂疏」、吉田兼俱「神書聞塵」という鎌倉期から室町期にいたる、「日本書紀」の注釈運動「中世日本紀」の生成のなかに、祇園社祭神としての牛頭天王の来歴が語り／語りなおされていく様相である。まさしく「日本書紀」の注釈学の展開こそが、これまで一般的に認識されてきた牛頭天王像を作り出したという、スリリングな知の現場が明らかにされるのだ。そしてそこにも、「日本紀の家」たるト部氏とともに中世の碩学・一条兼良の知の実践がクローズアップされるのである。

かくして本書の核心には、個々のテキスト（現行活字本のみならず、天理大学図書館吉田文庫蔵本、叢山文庫・毘沙門堂蔵本、東北大学図書館蔵本などの写本も）を徹底的に読み解くという手法を駆使しつつ、そのテキストから透視される「宗教者」たちの儀礼の現場への執拗なこだわりが見てとれる。それは「中世神話」の研究視座そのものの戦略であるが、そのことによって、鈴木のテキストの「読み」が、テキスト内部にとどまらずに「歴史」へと開かれていく可能性をもつたといえよう。

そこで本書が描き出した牛頭天王の中世神話からは、牛頭天王の

武器が「中世神話」という研究視座であった。

そこで第一章では、これまでの牛頭天王信仰の研究史を丁寧に追いながら、先行研究が分け入ることのできなかつた牛頭天王の「信仰世界」が、多種多様なテキストを解説する方法「中世神話」論によつて初めて可能となることを宣言する。すなわち「中世神話」は、始原を巡つて信仰の初發を検討することよりも、まさに神が変貌していく過程を検討することに意義がある（71頁）。ここで從来の研究が、牛頭天王＝祇園社祭神という「信仰の初發」にこだわり、それに呪縛されていたことを、あらためて気づかせてくれる。主題とすべきは、「変貌していく」牛頭天王の相貌であつたのだ。

その意味で本書の白眉ともいえるのは第三章だ。「阿婆縛抄」所収「感應寺縁起」の牛頭天王譚の読み解きから、祇園社祭神とは無縁で、なおかつ行疫神のレベルを遥かに超えた「万能神的」（194頁）な相貌が明らかにされ、その基底に觀音信仰とともに「壱演」なる異能の宗教者の存在があぶりだされていく。また第四章では、有名な蘇民将来譚をもつ曆注書「籠篋内伝」を徹底的に解説することで、「祇園社祭神」行疫神かつ除疫・防疫神から「曆神」という新たな神へと変貌した（229頁）。牛頭天王が見出され、やはりここでも「非官人陰陽師」（228頁）とのかかわりに焦点を当てていく。それを鈴木は「籠篋内伝」の「起源部」と「曆注部」との精密な読み解きから導きだす。

そして第五章では、従来、祇園社と結びつけられてきた「牛頭天王縁起」諸本中「最古の書写本」とされる文明一四年書写「牛頭天王縁起」のテキストを取り上げ、この縁起テキストが祇園社はおろか「特定の寺社の起源譚ではない」（276頁）ことを読み解き、「オコ

相貌が「両角尖にして猶夜叉の如し」（籠篋内伝）、あるいは「赤色ノ角」（牛頭天王縁起）といふ、醜悪で凶荒な相貌として語られること、それゆえ彼の妻は「沙竭羅龍宮」に住む龍女であることも大きな意味をもつて見えてこよう。とくに「籠篋内伝」で「衆生」の病の原因が「三毒」と記述されることには、牛頭天王の忌まわしい姿は衆生の「三毒」の代受苦を表象し、そこからは龍畜や蛇類、あるいは荒神、鬼神といった中世の異形神の系譜とともに、彼ら異形神たちが祭祀の功德を受けることで、異形の姿から脱皮し、衆生を救済する功力を得るという信仰機制も浮かび上がつてこよう。それは中世後期社会に広がつていく中世神道の展開という問題とともに、ロスしてくるだろう。あるいは巨旦にたいする執拗な「呪咀」「調伏」の表現には、呪詛神という問題とともに、密教や修驗道・陰陽道などの調伏儀礼も透視できるかもしれない。本書が、そうした「中世神道」のあらたな主題とも繋がつていくことは、充分予想されるところだ。

本書の結語で鈴木は、「中世神話」の方法的視座が、近年の研究状況のなかで充分に展開されていないことを、「研究の停滞」（319頁）と批判する。まさしく本書は、停滞する研究状況への異議申し立てであると同時に、われわれのまえに「中世神話」研究の新しい地平を展望させてくれた一書といえよう。

（二〇一九年七月一〇日 法藏館刊 三三一頁 三五〇〇円）